

2019年5月8日

学芸の森環境機構廃止（次次年度から）案を受けての部門長（5部門）会議（拡大版）の審議結果

報告者 学芸の森環境機構 機構長 渡辺雅之（健康・スポーツ科学講座）

開催日 1月21日（月）

時間 10:30～12:40

場所 若草研究室

出席者 機構長渡辺（兼環境学習推進部門長）／岩元（学芸の森推進部門）／臼倉（環境改善企画部門長）／森山（環境創造地域連携部門長）／新免（環境調査評価部門長）／真山（前機構員）・高坂（機構員）／中村（環境学習推進部門）

確認事項：学芸の森環境機構は、平成31年度は任期満了に伴う学系選出の機構員の補充はしないこととし、同年度を末をもって廃止される方向である。理由は教職員の負担軽減のための委員会等の統合再編によるものである。マンパワーと資金の減少が背景にある。これまでの機構の文化継承をどのように可能とするか。

○鷺山元学長のリーダーシップのもと2004年に有志を集めた学芸の森プロジェクトが設立され、やがて2年任期制（半数が毎年入れ替わる仕組み）の学芸の森環境機構へと整備されて今日に至る。学芸の森をすべての教職員共通の基盤とするために各学系から2名を選出することにしたが、環境や植物の専門的知識を有する機構員や関心が高い機構員の場合には活発な活動が期待されるも、そうでないと沈滞化する傾向があり、今日ではやや顕著になった感がある。

○小金井地区における樹木のマスタープランが未だ作成されていない。どこに、どのような種類の樹木を、どの程度の高さまで成長を許すか（高さ制限）等、水平面的なデザインに関心が向きがちなところで垂直面でのプランがないために（なので現状は伸び放題の高木化した樹木群が倒木や枝落ち等の危険要因となっている）、長期的な展望がない中での場当たりの対応に終始している（倒木したから撤去するが、根がそのまま放置され、抜根に要する費用がない現状がある）。

○豊かな自然を守り、これを学びに生かす仕組みづくりのためには、一部の専門家だけに依存するのではなく、自然のことを学ぶリーダーづくり（樹木医、グリーンアドバイザー等）やボランティアの育成が欠かせない。そのためのトレーニングコースを整備することが必要であるが、それをどこで、どのように実施できるのか。

○辟雍会との協働を視野に入れた活動をすることも重要である。好ましい連携関係をどのようにして築くことができるか。

○これまでの学芸の森環境機構の果たしてきた役割を、機構員として果たしてきた過去と機構員を外れて以降の現在までを通じて考えてみると、現在のような委員会形式での限界と有志によるボランティア組織的運営が適っているように思う。

○環境教育センターとの関係性をどのようにとらえ、関連を見出すことができるのか。これまでの学芸の森環境機構の歩みを考えると同センターに協力を依頼することが多々あり、活動内容の質的保証や組織的位置づけなど機構の今後の存廃にあたり、可能な在り方を模索すべきである。

○同好の志による「サークル」的な存在は考えられないか。その場合の監理的組織をどこに求めえるのだろうか。たとえば、環境に関わる副学長の下であったり、施設課内のどこかであったりなど。

○環境創造地域連携部門がこれまで醸成してきたボランティア組織の活動が、既報の「守り人の会」規定を含め、機構の存在下で担保されてきたものが、現機構の廃止後にはどのように変容されるのか、そもそもその存在が可能なのかを含めて「大学と地域の協働」としてのモデルケースを消滅させてしまうのか。あるいは、ボランティアとしての活動を維持、推進する母体をどこに、どのように位置づけるのか。

○地域連携課との協定を可能とするような団体を設立し、その協定の下でこれまでの機構の活動を継承させる案も考えられる。

○環境報告書は、大学による環境負荷および環境配慮等の取組状況について公表するものであることを確認し、今後とも本学らしい取組（特に学びに力点を置いた）を継続して行い、公表することが重要である。

以上